

ユルゲン・シュミットフーバー氏の Sakana AI 参画

―― 事実確認と影響予測 ――

2026 年 9 月 25 日

Claude Opus 5.5

要旨

- **【事実】** Sakana AI は 2026 年 9 月 24 日、シュミットフーバー氏が現職と兼任する形でチーフ・サイエンティフィック・アドバイザー（CSA）に就任し、同社の RSI（再帰的自己改善）Lab に携わると発表した^[1]。常勤・東京常駐ではなく、「定期的に東京を訪問」する助言型の参画である^[1,2]。
- **【事実】** 国内主要メディアは「現代 AI の父」の参画として好意的に報じた^[3,4]。一方、海外テック系メディアは新製品や実証成果を伴わない人事だと冷静に評価した^[5,6]。Bloomberg・Reuters 等の大手通信社による報道は、調査時点で確認できなかった。
- **【推論】** 最も確度が高い影響は、海外トップ人材の採用吸引力と、ソブリン AI・防衛・製造業向けの信用力の強化である。自己改善 AI の実用的ブレークスルーを短期にもたらす可能性は低く、同氏の長年のクレジット（優先権）論争を同社が抱え込むリスクもある。
- **【推論・知財】** 自己改善型 AI の研究開発への導入が進めば、兼任研究者の成果帰属、AI 生成成果における人間の寄与の記録、公開ライセンス条件の確認が知財部門の新たな実務課題となる。

凡例：【事実】は一次ソースまたは報道で確認した事項、【推論】は筆者の分析・予測、〔未確認〕は裏付けが取れなかった事項を示す。肩付き番号は文末の参考文献に対応する。

1. 発表内容（事実関係）

1.1 役職・関与形態

項目	内容
発表日	2026 年 9 月 24 日（公式ブログ） ^[1]
肩書	Chief Scientific Advisor（チーフ・サイエンティフィック・アドバイザー） ^[1]
関与形態	現職と兼任（英語版では alongside his current positions）。フルタイム雇用・東京常駐の記述はない ^[1]
拠点・頻度	定期的に東京を訪れ、チームと協働するとともに日本の AI エコシステム全体を支援する ^[1,2]
担当	RSI Lab の研究方向の助言（公式の表現は help guide＝舵取り支援）。エージェントがその中で計画できる世界モデルや、自ら実験を設計・実行するシステムに向けた助言を担う ^[2]
今後の予定	10 月下旬に来日し、東京で一般公開イベントを開催予定。日時・会場は未発表 ^[7]

1.2 参画の目的と本人コメント

【事実】 会社側は参画の目的として次の 4 点を挙げている^[1]。

- AI 人材の海外流出を反転させ、東京に世界的人材を集める。
- 言語モデル中心から、世界モデルを原動力とするフィジカル AI へ転換する。
- 日本の「ものづくり」を再興する（サプライチェーン最適化、実世界での試行錯誤なしのロボット導入など）。
- RSI Lab で、科学的発見が新たな発見を呼ぶ再帰的なサイクルを起こす。

【事実】 会社経由で公表された本人コメントは、日本がニューラルネットワークの基盤アーキテクチャと高度なロボティクスを生んだ国であり、両者の橋渡しを担いたいこと、知能の未来は言語だけでなく世界モデルを原動力とするフィジカル AI にあることを述べている^[1]。発表文はまた、福島邦彦氏のネオコグニトロン（1979 年）や甘利俊一氏の業績を同氏が長年称えてきたことを強調している^[1]。

1.3 既存の所属との関係

【事実】 公式発表は「現職と兼任」とのみ記し、個別の役職名は挙げていない^[1]。日経は「スイ

ス人工知能研究所などの現職と兼任」と報じた^[3]。KAUST の教員ページは同氏を生成 AI 中核拠点（Center of Excellence for Generative AI）の共同議長、コンピュータサイエンス教授と紹介している^[8]。Arab News（2026 年 9 月 17 日付の表示）や 2026 年 3 月のフランクフルト大学の講演告知は、「KAUST AI Initiative 所長」「IDSIA 所長」としている^[9,10]。欧州委員会の講演者プロフィールは、NNAISENSE の共同創業者・元社長、juergen.AI 創業者と記載している^[11]。いずれの職についても、退任の発表は確認できない。

【推論】 サウジアラビアの KAUST での要職と、日本の防衛・政府案件を抱える企業の CSA を兼ねる構図は、機密情報の取り扱いや研究成果の帰属について整理を要する可能性がある。各機関との契約条件は開示されていない。

1.4 共同創業者・本人の発言

【事実】 David Ha CEO は X で、同氏の思想が Darwin Gödel Machine や The AI Scientist に着想を与えたこと、東京の RSI Lab が同氏の指導の下でエージェントネイティブな世界モデルとフィジカル AI の再帰的自己改善に取り組むことを投稿した^[12]。

【未確認】 シュミットフーバー氏本人の X や個人サイトでの参画表明は確認できなかった。発表文がリンクする同氏の X 投稿（1987 年以來の RSI 研究を振り返り、RSI に言及する企業を列挙したものと推定）も、内容を直接検証できていない^[1]。Llion Jones 氏、伊藤鍊氏のコメントも確認できなかった。

1.5 報道のされ方

- **日本経済新聞**：「現代 AI の父」の参画として報道し、AI の開発工程を AI で改善する研究チームを同氏が指導する予定と伝えた（本文未取得、検索抜粋で確認）^[3]。
- **ITmedia AI+**：RSI 研究のアドバイザー就任として報道した。同氏と David Ha 氏が 6 月のブログで 1991 年に線形 Transformer の原型や教師なし事前学習を発表したと主張している点を、2017 年の論文で Transformer が提案されたとする通説と対比して紹介している^[4,13]。
- **海外テック系**：AlphaSignal は新モデル・製品・資金調達を伴わない戦略的な助言職と位置づけ^[5]、Superpower Daily は研究目標の提示であって動くシステムの提示ではないと評した^[6]。The Neuron 等のダイジェストでも取り上げられた^[14]。

- **【要注意】** KuCoin 掲載の速報は RSI Lab を「率いる (lead)」と表現したが^[15]、公式の表現は「guide (舵取り支援)」であり、不正確である^[2]。

2. 背景

2.1 シュミットフーバー氏の業績と論争

【事実】 主要業績は、LSTM (Hochreiter 氏と共著、1997 年)、1987 年のディプロマ論文での自己改善・メタ学習、1990 年の世界モデル・計画・人工好奇心、Gödel Machine、ハイウェイネットワーク (2015 年)、David Ha 氏との「World Models」 (2018 年) などである^[16,5]。同氏は 1990~91 年を「奇跡の年」と位置づける論考を公開しており^[17]、2026 年 6 月 18 日には IDSIA のホームページに「Munich 1991: the Roots of the Current AI Boom」を公開し、David Ha 氏が序文を寄せた^[18]。これは査読論文ではなく、個人の歴史的タイムラインである^[18]。

【事実】 同氏は、Hinton・LeCun・Bengio 各氏が先行業績を適切に引用していないと長年批判してきた^[19]。2024 年のノーベル物理学賞 (Hopfield・Hinton 両氏) についても、盗用に対する授賞だと評した^[20]。Hinton 氏は 2020 年、バックプロパゲーションを発明したと主張したことはないと反論している^[21]。コミュニティの評価は、主張に一理あるとする擁護と、誇張だとする批判に割れている^[22]。

2.2 Sakana AI との研究思想の親和性

【事実】 RSI Lab のページは、LLM-Squared (DiscoPOP)、Darwin Gödel Machine、ShinkaEvolve、ALE-Agent、Digital Red Queen、The AI Scientist を自社の系譜として列挙している^[2]。Darwin Gödel Machine は SWE-bench での性能を大幅に改善したとされ、名称自体が Gödel Machine に由来する^[23,24]。

【事実】 Sakana AI は、計算資源の量ではなくアイデアで進歩する「制約下の進化」を掲げてきた^[25]。**【推論】** 計算資源が高価だった時代から自己改善・メタ学習を主張してきた同氏とは、「スケーリング一辺倒への対抗軸」という点で思想が一致する。

【事実】 2026 年 9 月には、マルチエージェント・オーケストレーション「Sakana Fugu」の新版として、Fugu Max (100 万トークンあたり入力 2 ドル/出力 6 ドル) と Fugu Ultra v2 (同入力 5 ドル/出力 30 ドル、100 万トークンのコンテキスト) を公開した^[26,27]。同社は難関ベンチマー

クでの首位を主張しているが、自社発表であり、独立した検証は限定的である^[27]。

2.3 Sakana AI の現状

- **資金調達**：シリーズ B は 2025 年 11 月に約 200 億円、評価額約 26.5 億ドルで発表された^[28,29]。その後、同社の公式発表では総額約 320 億円（2 億ドル）に拡大し、資金調達後企業価値は約 4,320 億円、累計調達額は約 660 億円とされている^[30]。
- **主要出資・提携**：MUFG、Khosla Ventures、NEA、Lux Capital、Google、Citi、三菱電機、In-Q-Tel 等が出資している^[30,31]。NVIDIA とはシリーズ A の時点から協業している^[32]。
- **防衛・官公庁**：2026 年 3 月、防衛装備庁防衛イノベーション科学技術研究所と、指揮統制（C2）システムの高度化に向けた複数年の委託研究契約（「複数 AI 技術の組み合わせによる観測・報告・情報統合・資源配分 高速化の研究」）を締結した^[33]。同年 7 月 29 日には防衛省と「総合分析業務に必要な AI 機能の調査・実証」契約を締結し、8 月 24 日に公表した^[34,35]。日経は、同社が防衛分野を金融に並ぶ注力領域と位置づけ、人員を増やしていると報じた^[36]。
- **【要注意】** atpartners ニュースは防衛装備庁の資料に基づき契約額を約 9.7 億円と報じた^[37]。一方、別資料は情報本部案件の契約額を 3 億 2,903 万 2,000 円（防衛装備庁公表）としており^[38]、約 9.7 億円は 3 月の案件の金額である可能性が高い。いずれも一次資料は本稿で未確認である。
- **人材**：創業者は David Ha（CEO、元 Google Brain 東京チーム責任者）、Llion Jones（CTO、「Attention Is All You Need」共著者）、伊藤錬（COO、元外務省・メルカリ）である^[39,40,41]。最新の従業員数について公式の開示は確認できなかった。

3. 反応・評価

- **肯定的**：日経・ITmedia は大きく報じた^[3,4]。Global Sources は、グローバル市場での信用力になり得ると評価した^[42]。
- **慎重・懐疑的**：AlphaSignal は、40 年の理論と限定的な実証を経ても汎用的に自己改善する AI は出現しておらず、評価は測定可能な改善、透明な評価、ベンチマーク外での有用性次第

だと指摘した^[5]。Superpower Daily は、コードの連続改変による有用な改善はまだ実証されていないと論評した^[6]。

- **SNS**：RSI Lab の発表時（2026 年 6 月頃）の Hacker News では、流行を追う「ハイプ体質」だとする批判と、創業以来の進化的・集合知路線の一貫性を評価する擁護が拮抗した^[43]。
今回の参画発表を対象とした大規模なスレッドは確認できなかった。

【推論】全体としては、「話題性は高いが、技術的な新規性を伴わない人事」という見方に収斂しつつある。

4. 影響予測

以下はすべて【推論】であり、確度を併記する。

領域	予測	確度
採用・国際的存在感	世界モデル・自己改善研究の「源流」とされる人物の名が、とくに欧州・中東の研究者ネットワークからの採用に効く。RSI Lab は研究者を募集中であり ^[2] 、10 月下旬の東京イベントが発信の機会となる	高
研究方向性	言語中心からフィジカル AI・世界モデルへの重心移動が加速する。同社初の世界モデル開発を明言しており ^[1] 、年度内に論文・デモが出る可能性がある	中～高
研究力（直接寄与）	兼任・定期訪問という関与形態から、日常的な研究生産性への寄与は限定的。価値は研究課題の設定と、先行研究の再発見コストの削減が中心となる	低～中
資金調達	「効率型 RSI+フィジカル AI+ソブリン」のナラティブを補強する。ただし評価額を左右するのは、Fugu・防衛・金融案件の実績である	中
国内政策	ソブリン AI、ものづくり、AI for Science との結びつきにより、政府の研究開発支援や実証案件での発言力が高まる	中
国際競争	「スケーリング vs 効率・進化・自己改善」の対抗軸を可視化するが、計算資源の差は埋まらない	中

領域	予測	確度
科学研究の自動化	世界モデルと AI Scientist の統合が研究テーマ化する。機械学習以外の分野での自律的発見が 2026～27 年に実証される確度は低い	中

4.1 日本の AI 政策との関係

【事実】政府は 2025 年 12 月 23 日に初の人工知能基本計画を閣議決定し^[44]、2026 年 7 月 14 日に第 II 期の計画を閣議決定した^[45]。計画は AI for Science の推進や、製造業等の強み分野での AX 促進を掲げている^[45]。

【推論】Sakana AI は自社の成長ストーリーをこれらの政策課題と明示的に結びつけており、今回の人事はその説得力を高める。一方、Fugu は海外のオープンモデル・クローズドモデルを束ねるオーケストレーションであるため、「国産 AI」の定義をめぐる議論は残る。また、福島・甘利両氏の業績再評価を前面に出す語りは国内では響きやすいが、国際的には歴史修正的なクレジット主張と受け取られる余地がある。

4.2 国際競争と科学研究の自動化

【事実】RSI Lab は、フロンティア RSI が世界の 2 大計算クラスター内でほぼ独占的に試みられているとし、日本の計算資源の制約を「設計制約」として、効率的な自己改善を目指すと宣言している^[2]。

【事実】The AI Scientist は 2026 年 3 月に Nature に掲載され、生成論文がトップ機械学習会議のワークショップで第 1 ラウンドの査読を通過した^[46,47]。一方、同社自身が素朴なアイデアや誤った引用などの限界を認めており^[46]、外部評価でも文献調査の浅さや実験の失敗の多さが指摘されている^[48,49]。

【推論】「世界モデルが AI Scientist を動かし、AI Scientist がより良いモデルを作る」というループは研究テーマとしては魅力的だが、材料・生命科学など機械学習以外の分野での実証には時間を要する。

5. 知財面の示唆

- **公開方針**：【**事実**】RSI Lab は否定的結果を含めてオープンに公開すると宣言しており^[2]、論文・コード公開中心の方針が続く可能性が高い。ただし AI Scientist のリポジトリは独自のソースコードライセンス（責任ある AI ライセンスがベース）を採用し、生成論文での AI 使用の開示を求めている^[50,51]。「オープン」は無条件の自由利用を意味しない。
- **特許**：【**事実**】Torero Media の分析記事は、2025 年 6 月 1 日時点で出願人「Sakana」の日本国内特許出願は 0 件だったと報じた^[52]（その後の状況は未検証）。【**推論**】防衛・製造業案件の拡大に伴い、共同研究契約上の成果帰属や特許化の必要性は高まる（確度：中）。
- **先行技術**：【**推論**】同氏の「1991 年起源」主張は、特許実務において旧来の技術報告書を先行技術として掘り起こす動機を与える。
- **兼任者の成果帰属**：【**推論**】KAUST・IDSIA・Sakana AI のいずれに発明が帰属するかは契約次第であり、共同研究契約・職務発明規程の整備が前提となる。
- **AI 生成成果**：【**推論**】日本を含む主要国の裁判例・実務では AI を発明者と認めていない。自己改善ループが生んだ手法について、人間の寄与を記録・立証することが知財部門の新たな業務となる。

6. 提言

-
- **Sakana AI との協業を検討する企業**：人事の話題性ではなく、RSI Lab の成果物（公開論文、再現可能なコード、未見タスクでの汎化、計算コストの開示）をマイルストーンとして評価する。
 - **投資家・アナリスト**：Fugu・防衛・金融案件の収益と、自社ベンチマークの独立検証を評価基準とする。「現代 AI の父」という呼称には議論があり、判断の根拠にしない。
 - **政策担当者**：ソブリン AI 支援の評価指標として、国内で制御可能な層（モデル・データ・運用）の範囲を明確にする。
 - **知財部門**：AI 生成成果における人間の寄与の記録、兼任研究者との成果帰属条項、公開ライセンスの確認を、自己改善 AI 導入の前提として整備する。
 - **当面の注目点**：10 月下旬の東京イベントで、具体的な研究ロードマップ、関与時間、共同研究体制が語られるか。これが本人事の実質を測る最初の試金石となる。

7. 留意点（未確認事項）

- 本人名義の参画表明は取得できず、確認できたのは会社経由のコメントのみである。David Ha 氏の X 投稿は、第三者サイトの埋め込みで確認した。
- 日経記事（9 月 25 日・8 月 24 日）は本文にアクセスできず、検索抜粋等で確認した範囲にとどまる。
- Bloomberg、Reuters、TechCrunch、The Information、Nikkei Asia による今回の人事の報道は、調査時点で確認できなかった（未報道か未検出かは判別できない）。
- シリーズ B の調達額・評価額は、報道によって数値に揺れがある。防衛関連の契約額は二次情報である。
- Fugu Ultra v2 等のベンチマークは自社発表であり、独立した検証は限定的である。
- KAUST・IDSIA・NNAISENSE における現在の役職の詳細や、Sakana AI との契約条件（報酬・株式・時間配分）は開示されていない。
- 影響予測はすべて推論であり、とくに研究成果の時期に関する予測は不確実性が高い。

参考文献

URL は 2026 年 9 月 25 日時点で確認した。[URL 未確認] とあるものは、本稿作成時点で URL を特定・検証できていない。

- [1] Sakana AI「人工知能のパイオニア、ユルゲン・シュミットフーバー氏が Sakana AI に参画」（英語版：The Next Frontier: Welcoming AI Pioneer Jürgen Schmidhuber to Sakana AI）、2026 年 9 月 24 日。
<https://sakana.ai/schmidhuber/>
- [2] Sakana AI「Recursive Self-Improvement (RSI) Lab」（研究所紹介ページ）。<https://sakana.ai/rsi-lab/>
- [3] 日本経済新聞「『現代 AI の父』シュミットフーバー氏、サカナ AI に参画」、2026 年 9 月。
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUC250BY0V20C26A9000000/>（注：本文未取得。検索抜粋で確認）
- [4] ITmedia AI+「『現代 AI の父』シュミットフーバー氏が Sakana AI に参画 RSI 研究のアドバイザーに」、2026 年 9 月 25 日。<https://www.itmedia.co.jp/aiplus/article/2609/25/2000001742/>
- [5] AlphaSignal「Sakana AI Recruits LSTM Pioneer Schmidhuber to Lead Self-Improving AI Lab」、2026 年 9 月。<https://alphasignal.ai/news/sakana-ai-recruits-lstm-pioneer-schmidhuber-to-lead-self-improving->

[ai-lab](#)

- [6] Superpower Daily 「Sakana AI Hires Jürgen Schmidhuber to Advise New Self-Improvement Lab」、2026 年 9 月。 <https://superpowerdaily.com/posts/sakana-ai-hires-j-r-gen-schmidhuber-to-advise-new-self-improvement-lab>
- [7] Sakana AI 公式 X (@SakanaAILabs) 日本語投稿（シュミットフーバー氏参画と 10 月下旬の来日イベントの告知）、2026 年 9 月。 <https://x.com/SakanaAILabs/status/2103258183221575889>（注：X 本文は自動取得不可。検索抜粋で確認）
- [8] King Abdullah University of Science and Technology (KAUST) 「Jürgen Schmidhuber – Professor, Computer Science」（教員紹介ページ）。 <https://www.kaust.edu.sa/en/study/faculty/juergen-schmidhuber>
- [9] Arab News 「AI will contribute to 'new Golden Age for science' says top KAUST academic」（2026 年 9 月 17 日付の記事表示）。 <https://www.arabnews.com/saudi-arabia/ai-will-contribute-to-new-golden-age-for-science-says-top-kaust-academic-2311036>
- [10] Goethe-Universität Frankfurt 「Sondervorlesung: Artificial Intelligence – Ein Blick in Gegenwart und Zukunft der KI von Prof. Dr. Jürgen Schmidhuber」（講演告知）、2026 年 3 月。 <https://aktuelles.uni-frankfurt.de/en/event/sondervorlesung-artificial-intelligence-ein-blick-in-gegenwart-und-zukunft-der-ki-von-prof-dr-juergen-schmidhuber/>
- [11] European Commission 「Jürgen Schmidhuber」（講演者プロフィール）。 https://commission.europa.eu/jurgen-schmidhuber_sv（注：ページの更新日は未確認）
- [12] David Ha (@hardmaru) X 投稿（シュミットフーバー氏の CSA 就任告知）、2026 年 9 月 24 日頃。
[URL 未確認]（注：第三者サイトの埋め込みで文面を確認）
- [13] Yahoo!ニュース（ITmedia NEWS 転載）「『現代 AI の父』シュミットフーバー氏が Sakana AI に参画 RSI 研究のアドバイザーに」、2026 年 9 月 25 日。
<https://news.yahoo.co.jp/articles/5707c1809f67b698aeb5379854292a5df43932d1>
- [14] The Neuron 「Everything That Happened in AI Today (Thursday, September 24, 2026)」、2026 年 9 月 24 日。 <https://www.theneuron.ai/digest/everything-that-happened-in-ai-today-thursday-september-24-2026/>
- [15] KuCoin News 「Sakana AI Appoints Jürgen Schmidhuber as Chief Science Advisor」、2026 年 9 月。
<https://www.kucoin.com/news/flash/sakana-ai-appoints-j-r-gen-schmidhuber-as-chief-science-advisor>
- [16] Jazzyear 「Jürgen Schmidhuber: The Father of Generative AI Without Turing Award」。
https://www.jazzyear.com/article_info.html?id=1352
- [17] J. Schmidhuber, "Deep Learning: Our Miraculous Year 1990-1991", arXiv:2005.05744 (v4, 2025 年 7 月

- 28 日改訂)。<https://arxiv.org/abs/2005.05744>
- [18] A. Maier 「Five Months in Munich: Revisiting 1991, Without Erasing the Decades That Made It Scale」 (Substack)、2026 年。<https://akmaier.substack.com/p/five-months-in-munich-revisiting>
 - [19] AI Engineering (Medium) 「AI Academic Scandal: Schmidhuber Accuses Hinton and Yann LeCun」。<https://ai-engineering-trend.medium.com/ai-academic-scandal-schmidhuber-accuses-hinton-and-yann-lecun-d7b56aa9d3e4>
 - [20] J. Schmidhuber、LinkedIn 投稿 (2024 年ノーベル物理学賞に関する見解)、2024 年。https://www.linkedin.com/posts/j%C3%BCrgen-schmidhuber-39226872_sadly-the-nobel-prize-in-physics-2024-for-activity-7272407451272974336-zN8h
 - [21] Synced 「Who Invented Backpropagation? Hinton Says He Didn't, but His Work Made It Popular」、2020 年 4 月 23 日。<https://syncedreview.com/2020/04/23/who-invented-backpropagation-hinton-says-he-didnt-but-his-work-made-it-popular/>
 - [22] Hacker News 「Jürgen Schmidhuber: the Father of Generative AI Without Turing Award」スレッド。<https://news.ycombinator.com/item?id=44330850>
 - [23] Sakana AI 「The Darwin Gödel Machine: AI that improves itself by rewriting its own code」、2025 年。<https://sakana.ai/dgm/>
 - [24] Ry Walker Research 「AI Scientist (Sakana AI)」。<https://rywalker.com/research/ai-scientist>
 - [25] AWS Startups 「Letting nature lead: How Sakana AI is transforming model building」。<https://aws.amazon.com/startups/learn/letting-nature-lead-how-sakana-ai-is-transforming-model-building?lang=ja>
 - [26] OpenRouter 「Fugu Ultra v2 – API Pricing & Providers」。<https://openrouter.ai/sakana/fugu-ultra-v2>
 - [27] Sakana AI 公式 X (@SakanaAILabs) 投稿 (Fugu Max/Fugu Ultra v2 の公開)、2026 年 9 月。<https://x.com/SakanaAILabs/status/2098233826816205275> (注: X 本文は自動取得不可。検索抜粋で確認)
 - [28] TechCrunch 「Sakana AI raises \$135M Series B at a \$2.65B valuation to continue building AI models for Japan」、2025 年 11 月 17 日。<https://techcrunch.com/2025/11/17/sakana-ai-raises-135m-series-b-at-a-2-65b-valuation-to-continue-building-ai-models-for-japan>
 - [29] Aismiley 「Sakana AI、シリーズ B ラウンドで総額約 200 億円を資金調達。累計調達額は約 520 億円へ」、2025 年 11 月。https://aismiley.co.jp/ai_news/sakana-ai-series-b/
 - [30] Sakana AI 「Announcing Our Series B」 (シリーズ B 発表、2026 年 4 月 9 日更新版)。<https://sakana.ai/series-b/>
 - [31] ビジネス+IT 「日本発の AI ユニコーン Sakana AI が Google と戦略的パートナーシップを締結」。

<https://www.sbbit.jp/article/cont1/179274>

- [32] Sakana AI「シリーズ A 資金調達のお知らせ」、2024 年。 <https://sakana.ai/series-a-jp/>
- [33] ビジネス+IT（2026 年 3 月 14 日掲載）Sakana AI と防衛装備庁防衛イノベーション科学技術研究所の委託研究に関する記事。 <https://www.sbbit.jp/article/cont1/182603>
- [34] AIsmiley「Sakana AI、防衛省と『総合分析業務における AI 機能の調査・実証』に関する契約締結。情報を抜本的強化」、最終更新 2026 年 8 月 31 日。 https://aismiley.co.jp/ai_news/sakana-ai-mod-defense-analysis/
- [35] AI エージェントナビ「Sakana AI が防衛省の情報分析業務を支援 | AI エージェントによる実証を開始」、2026 年 8 月。 <https://aiagent-navi.com/news/sakana-ai-defense-intelligence-analysis/>
- [36] 日本経済新聞（2026 年 8 月 24 日）Sakana AI の防衛省契約に関する記事。 [URL 未確認]（注：記事名も未確認）
- [37] atpartners ニュース（2026 年 8 月 25 日）Sakana AI の防衛関連契約に関する記事。 [URL 未確認]（注：記事名も未確認。二次情報）
- [38] よろず知財戦略コンサルティング掲載資料「防衛省×Sakana AI『総合分析業務 AI 実証』デュープリサーチ報告」。 <https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/f2283dbf298bdde0c3bb.pdf>（注：契約額の一次資料（防衛装備庁公表資料）は本稿で未確認）
- [39] Kepple「Sakana AI、200 億円調達で海外展開を加速——日本発の持続可能 AI モデルを世界市場へ」。 <https://kepple.co.jp/articles/l2z-4ygcwbii>
- [40] Wikipedia「Llion Jones」。 https://en.wikipedia.org/wiki/Llion_Jones
- [41] STARTUP DB「伊藤錬」（役員情報）。 <https://startup-db.com/officers/1LwOmW2TPz5Qo0vG>
- [42] Global Sources「Jürgen Schmidhuber joins Sakana AI as RSI research advisor」、2026 年 9 月。 <https://www.globalsources.com/sourcing-digest/jurgen-schmidhuber-joins-sakana-ai-as-rsi-research-advisor/>
- [43] Hacker News「Sakana AI's Recursive Self-Improvement (RSI) Lab」スレッド、2026 年。 <https://news.ycombinator.com/item?id=48415633>
- [44] 内閣府「人工知能基本計画～『信頼できる AI』による『日本再起』～」、令和 7 年 12 月 23 日閣議決定。 https://www8.cao.go.jp/cstp/ai/ai_plan/aipplan_20251223.pdf
- [45] 内閣府「人工知能基本計画～日本 AX、より強く、より豊かに～」、令和 8 年 7 月 14 日閣議決定。 https://www8.cao.go.jp/cstp/ai/ai_plan/aipplan_20260714.pdf
- [46] Sakana AI「The AI Scientist: Towards Fully Automated AI Research, Now Published in Nature」、2026 年 3 月。 <https://sakana.ai/ai-scientist-nature/>

- [47] "Towards end-to-end automation of AI research", Nature (2026 年 3 月 26 日掲載)。
<https://www.nature.com/articles/s41586-026-10265-5>
- [48] J. Beel, M.-Y. Kan, M. Baumgart, "Evaluating Sakana's AI Scientist for Autonomous Research",
arXiv:2502.14297, 2025 年。 <https://arxiv.org/pdf/2502.14297>
- [49] "ScientistOne: Towards Human-Level Autonomous Research via Chain-of-Evidence", arXiv:2605.26340,
2026 年。 <https://arxiv.org/pdf/2605.26340>
- [50] SakanaAI/AI-Scientist (GitHub リポジトリ)。 <https://github.com/SakanaAI/AI-Scientist> (注: ライセンス変更 (2025 年 12 月) の詳細は LICENSE ファイルに基づく調査結果による。本稿作成時に再確認していない)
- [51] SakanaAI/AI-Scientist-v2 (GitHub リポジトリ)。 <https://github.com/SakanaAI/AI-Scientist-v2>
- [52] Toreru Media、Sakana AI の特許出願状況に関する分析記事。 [URL 未確認] (注: 記事名も未確認)